

宮崎県立西都原考古博物館 中期運営ビジョン評価表（平成29年度）

資料 5

評価欄の数値は4段階評価
 内部評価 4…達成できた 3…ほぼ達成できた 2…あまり達成できなかった 1…達成できなかった
 外部評価 4…期待以上できた 3…ほぼ期待どおり 2…やや期待を下回る 1…改善が必要

(1) 調査研究

() は前年度の実績

項目	評価指標	目標値	平成29年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
調査研究	論文等の執筆、研究発表等	年1回以上	各人、年に1回以上の執筆、発表を行った (同上)	<ul style="list-style-type: none"> 東 論文等5本 発表等5回 田中 論文等1本 発表等1回 堀田 論文等4本 発表等2回 藤木 論文等3本 発表等2回 谷口 論文等1本 発表等1回 沖野 論文等3本 発表等0回 永友 論文等1本 発表等0回 <p>○ 古代歴史文化に関する共同調査研究において、奈良県など14県と連携して古墳時代の玉の研究を継続して進めることができた。共同研究は平成29年度までに終了し、平成30年度は成果図書の制作と展示会が開催される。(江戸東京博物館)</p> <p>○ ドイツのチュービンゲン大学、広島大学と共同で、景観考古学の視点による西都原古墳群の調査に着手した。ドローンや無人飛行機を用いて古墳群の全体撮影を実施し、3次元地形モデルと微地形計測、古墳群の立地や景観の検討を行う。3～5ヶ年継続の予定。</p> <p>※ 今後も、国内外の研究者と交流を図り、最新の研究の動向を踏まえながら調査研究を進め、その成果をあらゆる機会をとらえて公開していきたい。</p>	-	4	<p>① 「企画展」「特別展」等や「年報」からも、よく取り組んでいることがわかる。考古学に特化した博物館であるだけに、専門的になり難い面もあるが、発表会(報告会)を何らかの形で行うことが良いのではないかとと思われる。</p> <p>② 景観考古学の視点による調査など、新しい取り組みを評価したい。古墳群の空からの撮影については、今後、館のPRにも活用すべき。</p> <p>③ 日本の歴史や文化に興味がある人や国は多い。ここ西都から是非、世界に向けて発信して欲しい。それにより、それらの良さを再発見する機会となり、さらに活気づくのではないかと考える。</p>	3.8

(2) 収集保存

項目	評価指標	目標値	平成29年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
鉄製品 (古人骨・土器・石器等)	保存処理件数	年50件以上 (※外部委託を含める)	68件 (110件)	<ul style="list-style-type: none"> 鉄製品 内部処理 63件 外部委託処理 5件 計 68件 <p>○ 鉄製品については、本館の保存処理機能を活かして西都原111号墳出土掛甲小札、西都原265号墳出土鉄鏃等の保存処理を行うことができた。</p> <p>○ 古人骨に関しては、収蔵資料の整理や計測などを継続して行った。また、西都原古墳群における古人骨出土事例についての追跡調査も実施した。</p> <p>○ 土器・石器に関しては、収蔵棚整理と資料のデータベース化を目的として、収蔵資料の再チェックとコンテナ内資料の整理を継続して行った。また、古墳群整備に伴う新たな発掘調査資料の整理作業や、館蔵の古墳時代の玉資料の検討・報告を行った。</p> <p>※ 今後も、博物館の基本的機能であり、調査研究、展示の基礎となる「資料の収集保存」を適切に行い、館内外の活動への積極的な活用を図って行きたい。</p>	4	4	<p>① 写真のデータベース化の取組が進んでいることがわかった。</p> <p>② 県内遺跡からの出土品が、それぞれよく保存されている。収集保存されているものの中から、タイムリーな話題等については、情報を提供する事もあってよいのではないかと。</p>	3.8
図書・写真等	収集、分類、登録件数	年1000件以上	1,765件 (1,387件)	<ul style="list-style-type: none"> 図書登録数・・・993件 写真登録数・・・772件 計1,765件 <p>○ 図書については、貴重な古書の寄贈が259件、各研究機関が刊行した一般寄贈図書が719件、購入本が15件の登録を実施した。</p> <p>○ 写真については、西都原46号・202号の空中写真を中心に撮影フィルム等のデジタル化を行った。</p>	4			

(3) 展示

項目	評価指標	目標値	平成29年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
入館者	入館者数	年12万	129,278人 (121,201)人	※ 入館者については、平成28年度に引き続き目標の年間12万人を達成し、口蹄疫発生前の状態に戻りつつある。今後も、一人でも多くの方に来館してもらえよう、興味・関心を喚起し、感動を与える展示を行っていききたい。			【展示に全般に関する意見等】 ① 資料を大事にしたり、展示に工夫をしている。 ② 展示や企画展などにおいて創意工夫がなされており、学芸員の意識の高さを感じる。このことが入館者目標12万人達成につながったのではないかと思う。今後も感動を与える展示を期待したい。 ③ 展示物が大変工夫されている。配置や照明、解説に至るまで関係者の思いや考えがとてもよく伝わっていた。	
特別展	実施回数	年1回	年1回 (年1回)	<p>①特別展「日向諸県君と葛城氏」 大王家と密接な関係を築いた古代豪族として記紀に名を残す諸県君と葛城氏について、両者が活躍したとされる5世紀代の古墳や集落から出土した資料を中心に紹介した。【2017/07/15～2017/09/10 入場者数 20,933人】</p> <p>○ 諸県君と葛城氏に関する資料だけでなく、大王家に関連する百舌鳥・古市古墳群も取り上げたが、同古墳群が7月に世界遺産候補と決定したこともあり、時宜にかなった内容となった。</p> <p>○ 畿内と南九州の資料を並べて展示したことにより、両者の深い関係性がよく理解できたとの声があった。</p> <p>● 巨大な古墳を築造した畿内や南九州の有力者と、文献に記された「諸県君」「葛城氏」とがどのように結びつくのかという問題について、もう少し掘り下げることができれば、内容的に深まったと考えられる。</p> <p>◎参考(平成28年度) 「化内の辺境 ～隼人と蝦夷」 【2016/07/16～2016/09/11 入場者数 21,555人】</p>	—	4	<p>【特別展に関する意見等】</p> <p>④ 特別展等で南九州の地域性や東アジアにおける位置付けを明らかにすること、大変良く取り組んでいると思う。基本的には、それぞれの観覧者で何かを感じとってくれればよいと思う。一方で、現時点での考古学の学説も紹介しつつ、展示を行っている意義(意味づけ)についてもふれてよいのではないかと思う。</p> <p>⑤ 「日向諸県君と葛城氏」 諸県君牛諸井という豪族が日向におり、その娘髪長媛が仁徳天皇の妃になったことは、歴史に興味をもつ県民は大方知っていると思われるが、特別展「日向諸県君と葛城氏」は日向と中央との関係について明確に解説した企画であった。大阪堺の巨大な前方後円墳群と西都原女狭穂塚との関係、中でも女狭穂塚と仲津山古墳は同一設計図で作ったのかと思うほど似ている印象、また、家型埴輪や高さが同じ円筒埴輪なども共通する資料としての展示であった。距離的に大きく隔たる中央(大阪)と日向、道は未整備であったと思われるなか、西都原と藤井市で出土した舟形埴輪は中央との結びつきを理解できる展示であった。</p> <p>⑥ 特別展からコレクションギャラリー展まで、目標値を超える年間8回もの展示をされ、一見大変活発ではあるが、逆に十分な検討や準備をする余裕がなく、デメリットが大きいと懸念している。平成29年度の展示では、特別展の「日向諸県君と葛城氏」という名称、とりわけ講演会の演題「5世紀のヤマト王権と諸県君・葛城氏」に問題があった。5世紀代に氏姓制度は未成立であるから「諸県君」はまだなく、展示された5世紀代の出土遺物は「諸県君」と結び付かない。したがってこれらの名称と演題は、県民・市民をミスリードするものであったと言わざるをえない。この特別展の名称及び講演会の演題は、平成29年4月の「6館イベントご案内」リーフレットに掲載されて目にしたものだが、演題についても講師が決定する前から予定された、考古博の提案であったと承知している。その後、展示会場の説明文、図録、そして年報では、繰り返し氏姓制度が未成立であったことに言及されている。しかしこれらの細かい説明よりも、タイトルのほうがポスター等に大きく書かれて目立ち、県民に広報され、また、将来に受け継がれるであろう。宮崎県における考古学の研究成果を公開する代表的な館の活動として、大変残念である。なお、内部評価において、「巨大な古墳を築造した畿内や南九州の有力者と、文献に記された「諸県君」「葛城氏」とがどのように結びつくのかという問題について、もう少し掘り下げることができれば、内容的に深まったと考えられる。」と課題に上がっているが、そういう検討を行えないまま展示の企画を立てられた点に、大きな問題があったと考えている。</p>	3.8
国際交流展	実施回数	年1回	年1回 (年1回)	<p>②国際交流展「台湾鉄器文化の粋 新北市十三行遺跡と人びと」 東アジアと東南アジア、南太平洋地域との接点として、古来重要な地位を占めてきた台湾、その台湾鉄器時代の代表的遺跡である十三行遺跡(新北市)を取り上げ、様々な出土品から十三行の高度な文化や華やかな精神文化を紹介した。【2017/10/07～2017/12/03 入場者数 21,244人】</p> <p>○ 新北市十三行博物館との共催により、台湾国定遺跡である十三行遺跡の出土品を海外で初めて展示することができた。</p> <p>○ 台湾資料だけでなく南九州資料も展示することにより、「交流」による社会の発展性についての理解が深まった。(3ページにつづく)</p>			<p>【国際交流展に関する意見等】</p> <p>⑦ 西都原考古博物館は台湾の十三行博物館と韓国の羅州博物館と学術文化交流協定を結び、共同調査や研究の分野で職員の交流を行っているという。昨年度の実績をみると、 4月、台湾新北市考古生活節に招待され土笛や竹笛作製体験 8月、台湾に招聘され、西都原古墳群の保存・管理と活用について発表 10月、韓国で日本の祭りや踊り、神楽について発表、韓国の祭祀遺跡の資料調査 12月、韓国で講演 10月から12月には交流の成果を特別展で披露 (3ページにつづく)</p>	

項目	評価指標	目標値	平成29年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
国際交流展	実施回数	年1回	年1回 (年1回)	<ul style="list-style-type: none"> ● 十三行遺跡から出土した各資料の年代的位置づけや性格については、台湾でも研究途上ということもあり、詳細に取り上げることができないものも多かった。 ◎参考(平成28年度)「馬韓・百済と南九州」 【2016/10/08～2016/12/04 入場者数 25,577人】 			現在の館職員による交流事業は殆どの県民は知らないで、この交流事業に県民を同行させてはどうだろうか。定員を決めて応募し、旅費等は参加者負担、引率その他はツアー会社に委託するというもの。当館職員の講演を聴く、遺跡調査の様子を見学する等は、博物館の役割、職員の研究・調査を理解することで、博物館に対する県民理解が向上すると思われる。さらに、マスコミの同行取材があれば効果はもっと大になると思われる。	3.8
企画展	実施回数	年2回	年2回 (年2回)	<ul style="list-style-type: none"> ③企画展Ⅰ「色が語る いにしへの技と心」 色の変化から見えてくる技術の発展や他地域との交流、そして色に込められた人々の思いを、考古学の資料から探る展示会を実施した。 【2017/04/22～2017/06/18 入場者数 23,660人】 ○ テーマが「色」であることから視覚的にも楽しめ、考古学に普段馴染みのない人々の関心も惹くことができた。 ○ 県内資料を中心に展示したことで、来館者に宮崎県の多彩な考古資料を紹介することができた。 ● 赤・黒・白・灰・緑・金と色で展示資料を区分し、縄文～近世までの幅広い資料を取り上げたが、色からみた各時代の特徴や変化を追うことは難しかった。 ◎参考(平成28年度)「藻塩焼く～日向の塩の考古学」 【2016/04/23～2016/06/19 入場者数 17,359人】 ④企画展Ⅱ「豊と日向～日出国の考古学」 東九州という枠組みで括られる「豊」と「日向」(現在の分県と宮崎県)の各時代の特徴を紹介し、共通点や異なる側面を明らかにする展示会を開催した。 【2018/01/13～2018/03/18 入場者数 15,163人】 ○ 県外機関(分県立埋蔵文化財センター)と合同で展示会を実施することで、分県所蔵の重要文化財(宮崎初公開)ほか、多数の資料を公開できた。 ○ 東九州道整備をはじめ宮崎・分間の交流が活発化する中で、来館者等が相対的目線で宮崎・分の歴史理解を深める契機とすることが出来た。 ◎参考(平成28年度)「其顔容麗美～顔の考古学」 【2017/01/14～2017/03/20 入場者数 15,070人】 	—	4		
コレクションギャラリー展	実施回数	年3回	年4回 (年4回)	<ul style="list-style-type: none"> ⑤コレクションギャラリー展Ⅰ…「修理と転用」 【2017/06/20～2017/07/09 入場者数 4,824人】 ◎参考(平成28年度)「隼人の盾」 【2016/06/25～2016/07/10 入場者数 3,197人】 ⑥コレクションギャラリー展Ⅱ…「海幸・山幸の世界」 【2017/09/12～2017/10/01 入場者数 4,026人】 ◎参考(平成28年度)「雁木玉 GANG I DAMA」 【2016/09/17～2016/10/02 入場者数 4,995人】 ⑦コレクションギャラリー展Ⅲ…「蛇行剣」 【2017/12/05～2018/01/08 入場者数 5,629人】 ◎参考(平成28年度)「顔のない土器」 【2016/12/10～2017/01/09 入場者数 4,151人】 ⑧コレクションギャラリー展Ⅳ…「ものの見方」 【2018/03/20～2018/04/15 入場者数 12,016人】 (2017年度末現在の入場者数 6,638人) ◎参考(平成28年度)「棟を寄せ 妻を切る～古代住居の復元」 【2017/03/25～2017/04/16 入場者数 11,547人】 ⑨その他の展示 通年企画展「西都原古墳群の最新調査」 年5回 西都原古墳群の保存整備や活用のための事業で調査された古墳の最新の調査成果を紹介した。 ①西都原202号墳 ②西都原284号墳 ③西都原265号墳 ④西都原46号墳 ⑤西都原201号墳、4・5・6・10・12号墳 ○ 常新展のコーナーを使って行った展示で、来館者からも要望のあった西都原古墳群の個々の古墳について、調査成果を主とした紹介ができた。 ○ 各種展示会のテーマや関連イベントの内容を検討し、多くの方々に興味を持っていただく努力を継続したことで、入館者の増加にも繋がっている。 				

(4) 情報発信

項目	評価指標	目標値	平成29年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
広報活動の充実	報道機関への情報提供回数	年12回以上	年19回 (年16回)	<ul style="list-style-type: none"> 報道機関への情報提供 展示会(年7回)、講演会・考古博講座(年5回)、体験・実験講座(年5回)、考古博少年団(年1回)、現地説明会(1回) ○ 情報提供を受けて、報道機関からの取材や問い合わせが多くあった。(報道取材報告書15件) ○ 大分市内の旅行会社16社を訪問し、団体旅行等での利用をお願いした。 ● 広報の時期が遅れることがあった。 ※ 情報提供の時期やタイミングによって、PR効果に差が生じることも考えられることから、適切な時期を捉えて広報を行う。 ※ 庁内掲示板やマスコミの利用など、広報手法のさらなる検討を行う。 ※ 今後も、県内だけでなく、県外に向けたPR活動を進めていきたい。 	-	3	<ul style="list-style-type: none"> ① 各方面への情報発信や学校に出向いての努力がよくわかった。考古博物館少年団活動は、新聞にも取り上げられ、よい啓発になったと思う。団員が30数名という人数の多さにも驚いた。 ② 地理的な条件等を考慮すると、博物館を目的に訪れる入館者数を今後大幅に増加させることは、かなり難しいと思われるので、桜やコスモス、ヒマワリなどが目的の観光客を、うまく博物館に誘導する仕かけを工夫することを考える必要がある。 ③ 博物館も重要な観光資源であり、そのような視点で県外の旅行会社等に情報発信する取り組みは、今後も継続して欲しい。 	3.6
博物館ホームページの充実	博物館ホームページ【Facebook】の充実	月2回以上	年50回【105回】 年51回【97回】	<ul style="list-style-type: none"> 博物館ホームページの更新回数 ホームページ 年50回の更新 Facebook 年105回の更新 ホームページのアクセス数 年1,844,546件 (平成28年度 1,659,233件) 				

(5) 教育普及

項目	評価指標	目標値	平成29年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
生涯学習の一環としての教育普及活動	講演会・講座の実施回数	年15回以上	年16回 (年16回)	<ul style="list-style-type: none"> 講演会(特別展・国際交流展関連) … 年2回(7月、10月) 考古博講座 … 年5回(5月、8月、11月、2月、3月) 体験・実験講座 … 年6回(6月、9月、10月、12月、1月、2月) 考古博物館少年団 … 年間9回(6月～3月) 講座数としては1回とカウント 団体予約件数 … 385件(平成28年度 418件) ○ 体験・実験講座参加者へのアンケートでは、講座の内容に関して「満足」と回答した方が9割を超えていた。 ● 講演会・考古博講座にリピーターとして参加される方も増え、興味関心の高まりは感じられたが、全体的な参加者としては少ない講演会や講座もあり、検討の余地がある。 ※ 考古学専門博物館に設置された古代生活体験館としての趣旨や意義を十分に理解し、体験メニューの改善や指導法の充実を図る。 	-	3	<ul style="list-style-type: none"> ① 公共交通機関の利用を考えると、県内の小・中・高等学校等の利用を増やしていくことは難しいと思うが、子供達の興味・関心をひくプログラムの開発や展示の内容等について、今後も学校と連携して取り組んで欲しい。体験型の展示や子供達が自由に触れることができる展示の充実をお願いしたい。 ② 新富町内の全小学校で利用している。職員の方やボランティアの方々のわかりやすい、丁寧な説明により、子ども達の満足度も高く、貴重な文化財に親しむ機会になっている。 ③ 入館すると満足度は高いと思う。あるいは、関心が高まると言った方がよいのかもしれない。そのためにも、足を運んでもらうということだと思う。学校行事等と組み合わせたり、各種研修会等の場所を提供し、観覧の時間を確保したりすることを、さらに進めるとよいのではないかとと思う。 ④ 校外学習に参加した5・6年生の児童が、体験学習(火起こし)にとっても満足していた。児童は展示物に興味を示し、職員は展示物を少しずつ変えている博物館の努力に感心していた。 ⑤ 近くにこのような施設があることがとてもうらやましい。何とかして、すべての児童生徒に見学できる機会を設けたいが現実には難しい。義務教育の間に必ず一度は利用できるようなシステムや予算をつけるような要望ができるとありがたい。 ⑥ 学校教育との連携で、子ども会やPTA活動の中で利用できることや、展示の内容も色々と変わっていることを、もっと県内の学校等に発信していくとよいのではないかとと思う。 	3.4
学校教育との連携				<ul style="list-style-type: none"> 教員対象講座 … 1回(8月) 小・中学生対象講座 … 1回(7月) 博物館実習1名、職場体験(中学校2校4名)、インターンシップ(大学1名、高校2校6名) 学校関係の予約件数148件(平成28年度 162件) ○ 義務教育世代を対象とした小中学生対象講座や考古博物館少年団の活動においては、子どもたちの関心も高く毎回積極的に活動していた。 ○ 7月に西都市内の小・中学校を訪問し、全児童・生徒に古代生活体験館の体験メニュー及び特別展のチラシ配布を依頼し、夏季休業中の利用促進を図るとともに、学校行事や研修会等における当館の活用を直接お願いした。また、西都・児湯地区の県立学校6校にも訪問し、学校行事やPTAの視察等での利用をお願いした。 ● 教員対象講座は、受講者が少なかった。 ※ 教員対象講座については、教員だけに限らず、教員を目指す学生にも対象を広げて募集していく。 ※ 今後も、学校の意見等を取り入れながら、当館のプログラムと学校の教育活動の連携を強化していきたい。 				

(6) 経営

項目	評価指標	目標値	平成29年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
県民等からの意見の反映	-	-	-	<p>○ 1年を通してアンケートを実施しているが、毎年11月中旬から12月中旬の1ヶ月間はアンケート月間として、アンケートの設置場所を増やし回収強化に努めた。アンケートの記載内容については、展示方法やボランティアガイドに対して評価する声が多数寄せられている一方で、「順路がわかりづらい」、「もっとPRをした方がよい」といった意見も寄せられている。 なお、対応可能な改善要望については、迅速な対応を行った。</p> <p>● 本館のコンセプト等が十分に伝わっていないことによる改善要望もあるので、来館者に理解していただけるよう丁寧に説明を行う必要がある。</p> <p>● アンケート月間以外の回収件数を増やす必要がある。</p> <p>※ 展示室内で自分の位置を表示したり、展示物の説明などを聞くことができるスマートフォンアプリや案内図など、提供しているサービス内容の周知を徹底する。</p> <p>※ 利用者サービスの向上のためには、県民等の意見を反映させることが重要であるため、アンケート月間以外でも積極的に声かけを行い、少しでも多くアンケート回収に努めたい。</p>	3		<p>【全体を通しての御意見】</p> <p>① 努力していると思う。それが何度も足を運んでもらうことに、なかなかつなげられていない。</p> <p>② 調査研究、収集保存、展示では、大変成果を上げていると思う。学術的にも国際交流の面からも評価できる。ただ、それらの努力が県民をはじめ一般に十分伝わっているか、という点が課題と考えられる。人数のみが評価基準ではないが、古墳群と一体となった考古学博物館のすばらしさをわかってもらえれば、来館者はさらに増えると思う。</p> <p>③ 評価の方法に関して、評価数値の説明が内部と外部で一部異なり、また、総合博物館とも異なっていて、わかりにくいので、整合性がとれるよう検討して欲しい。特に「達成できた」を3にするか、4にするかは重要なので、できれば統一したほうがよいかと考える。個人的には4段階評価だと3が「達成した」、4が「目標以上」がよいのではないかと思う。</p> <p>④ 日本の代表的な考古博物館の一つとして、「県立西都原考古博物館」はその使命に相応しい活動を行っていると感じている。現在の「県立西都原考古博物館」の立地位置(西都市の丘陵上)は景観に恵まれた利点であり、西都市の丘陵上にあることから生じる交通の不便性は、現在のところ欠点でもある。しかし、この二点を統合した新しい発展の方策を追求することは困難な課題であるものの、必ずしも不可能ではないと期待している。</p> <p>⑤ いずれの分野も充実した内容であり、博物館としての役割、機能を十分に発揮していると感じている。</p> <p>⑥ 事務方、学芸の皆さんの努力に敬意を表す。</p> <p>⑦ 調査研究、収集保存、展示については、現在行われている「共に生きたもの」もそうであるが、新しい切り口で興味深く、高く評価する。内部評価で「3」としている情報発信、教育普及においても、大変に魅力を感じるボランティア組織を長年にわたり維持しているだけでも十分に評価したい。ただ今後、ボランティアの方々の質の向上と基礎水準の維持に十分配慮してもらいたい。</p>	3. 1
県民等との協働	-	-	-	<p>○ 本館の運営支援業務を委託しているNPO法人(iさいと)と協力し、ボランティアガイドの募集や研修、団体受入れ業務等を実施した。また、運営支援の一環としてミュージアムコンサートや県内クラフト作家による「博物館d eマルシェ」を春と秋の2回開催し、新たな利用者の創出に努めた。</p> <p>○ 本館職員及びNPO法人(iさいと)職員で構成している魅力増進検討委員会において、古代生活体験館における利用促進について検討し、昨年に引き続き夏休み向けの古代生活体験館チラシ配布や「銅鏡をチョコレートで作ってみよう」等を行い、利用者の増加に努めた。</p> <p>※ 今後も、NPO法人・西都原ボランティア協議会・西都市等の関係団体と緊密に連携し、利用者の満足度向上に努めたい。</p>	4			
職員の資質向上	-	-	-	<p>○ 全職員を対象にコンプライアンス、人権、交通安全(6年連続無事故無違反継続中)研修等を実施した。</p> <p>○ 県外研修として、文化財防災ネットワーク推進事業による水損資料応急処置ワークショップや、金属製遺物の調査・研究に関する研修会、観光と文化財の保存・活用をテーマとした研究協議会等に参加し、現状や課題等の理解を深めた。</p> <p>● 研修成果を会議等で報告を行うなど、職員間の情報共有が必要である。</p> <p>※ 今後も、研修等の機会を確保し、全職員の資質向上に努めたい。</p>	3	3		
危機管理体制の強化	-	-	-	<p>○ 年度初めに危機管理マニュアルを全職員(県職員、NPO、ボランティア、委託業者)に配布し、危機管理意識の向上を図った。</p> <p>○ 11月には、南海トラフ巨大地震を想定した県民一斉防災行動訓練に参加し、館内での安全確保行動に係る訓練を実施した。</p> <p>○ 県が主催する普通救命講習を職員2名が受講し、AEDの使用法や応急手当の方法について学んだ。</p> <p>○ 2月には、防災総合訓練として全職員(県職員、NPO、ボランティア、委託業者)を対象に、震度6程度を想定した避難誘導訓練を西都市消防本部職員立ち会いの下、実施した。また、消火器・消火栓を実際に使用しての消火活動及び3階ラウンジに備え付け救助袋の取り扱いについての訓練も併せて実施した。</p> <p>※ 職員一人一人が、平日頃より危機管理意識を持っておく必要があるため、今後も訓練や研修・講習を通じて職員の防災、危機管理に対する意識の高揚に努めたい。</p>	3			
施設設備の管理	-	-	-	<p>○ 施設・設備の老朽化や更新時期を迎えているものがあるが、大規模なものは膨大な予算を伴うため、関係機関と協議を行いながら計画的な修繕・改修に努めた。平成29年度は、遺構保存覆屋屋根の雨漏り補修工事、中央監視装置無停電電源装置及び監視カメラ設備の更新工事等を行った。</p> <p>● 遺構保存覆屋の屋根にシロアリが発生しており、調査・改修が必要である。</p> <p>※ 今後も、関係機関と連携を図り、年次整備計画に基づきながら効率的な修繕改修に努めたい。</p>	3			